

令和元年度 学校防災教育実践モデル地域研究事業 成果発表会 記録

1 授業者の自評

- ・ 初めは「自分の身を守る」を授業のテーマに考えていた。しかし、昨年度の豪雨災害の経験から人とのつながりの大切さを実感したり、防災教育を通して防災意識に変容が見られたりしたことから、今回の授業を「みんなのために自分たちができること」という共助の視点で組み立てることにした。
- ・ HUGの活動では、一人一人真剣に考えていたが、「障害がある人＝何をするか分からない、危ない」といった言葉も見られたので、事後指導が必要である。
- ・ 一教室に大人数を入れるなど、避難所運営として不可能なこともあったが、子どもたちは発達段階に沿った思考で判断し、話し合うことができていたと思う。
- ・ 最後の「自分たちができること」については、マナー面や共助について、小学6年生ができることを考えられていた。

2 質疑応答

- ・ 先日開催された「いじめフォーラム」で、岩城小学校の6年生が3人参加していたが、積極的に発言しており、部会の司会者も岩城小学校の児童に助けられたと言っていた。学級運営・学校運営が高い目標で行われている成果であり、真剣に授業に臨む子どもが育っていると感じた。

授業のねらいに「気付くこと」と「考え、行動する」の二つあったが、どちらに重点を置いたのかを教えてほしい。また、学習形態など、アクティブラーニングを意識した授業であったが、授業の導入の「全体」と終末の「全体」の持ち方や授業の組み立て方について教えてほしい。

→ 自分たちの学校が避難所になったらということを具体的にイメージして、「自分たちができること考える」ことに重点を置いた。

授業の組み立てについては、グループでの活動の後に全体で意見を聞くと、人の意見に流されてしまうので、自分の意見をもって話し合いに参加してほしいと考え、終末を「個人」

→ 「全体」の流れにした。

- ・ 夏に開催されたPTA研究大会で避難所運営ゲーム「HUG」を体験したが、次々にやって来る避難者の対応に追われて大変だった。本時の6年生は自分の意見をもって活動できていて、とても感心した。このゲームには正解がないので、その時点で最善のことを考えて行動することが大事だと感じた。また、「自分たちにできること」もしっかりと考えられていた。

2グループだったので、「〇〇が難しかったのだけど、どんなふうにしたか」というような、お互いのグループでの意見交換があったらもっとよかったと思う。児童は各活動に主体的に取り組んでいたが、初めに「家族で避難することをイメージ」したのに、「HUG」では家族をばらばらに配置するなど、一つ一つの活動が次につながっていなかったことが残念である。「家族」を意識させてからの「HUG」への流れや、「HUG」の中で避難してきた人たちに対して「何ができるか」を考えるなど、流れを意識するとよい。
- ・ 基礎的な学習習慣が定着していて、挙手や発表の態度など大変立派であった。外国人や車いすの人への配慮など、他者を思いやることができている、人権感覚が磨かれている。実際に避難所運営ゲーム「HUG」を体験したことがあるが、今回は子どもたちの実態に合わせて自作されていたのがすばらしかった。自作する際に工夫した点などを教えてほしい。

→ 「HUG」の姉妹品に外国人ができるように改良されたイラストふりがなバージョンがあり、それを参考に作成した。元のバージョンより情報量を減らしており、難しい言葉を分かりやすく直してイラストが添えられている。また、今回は時間が限られていたので、ここは押さえない、考えてほしいという内容に沿ったものを、順を入れ替えて提示した。
- ・ 1年の研究指定であったが、実際は半年ほどの期間で、保護者の意識の変容が見られたり、自助から共助への意識の高まりが見られたりするなど、高次の成果を上げるのは大変だったと思う。校長先生のリーダーシップのもと教職員が一致協力し組織的、機動的な学校運営が行われた結果である。「自他の命を守る」「自らが学ぶ」などの教育目標は、人権教育の目標やアクティブラーニングの理念にも通じる高い目標であり、すばらしい実践がなされている。この実践を町内の学校教育や地域教育にも広げていってほしい。
- ・ 半年という短い期間ではあるが、さまざまな実践を行い、成果を上げており、小中学校の取組に感心した。この活動を地域にまで広げていくためには行政の力が必要であるので、今後の行政の取組にも期待したい。
- ・ 防災教育研究指定のため、熊本に研修に行く機会があった。実際に震災で避難所を運営した方の言葉に、子どもの力がとても有効であったという話があった。子どもたちは自分たちにできることを考え、実行していたそうである。大人が注意するとお叱りするようなことでも、子どもたちのお願いや提案で雰囲気が変わり、みんなが頑張ろうという気持ちになるそうである。岩城小学校の児童にも思いやりのある発言が見られ、頼もしく思った。

3 指導助言 愛媛大学防災情報研究センター 准教授 二神 透 先生

- ・ 避難所運営ゲームでは自作のカードを作成しており、すばらしい実践であると思う。元となったカードには情報が多く、小中学生には難しいが、本時に使用したカードは見やすくシンプルにまとめられていた。
- ・ 児童は互いに相談しながら、配慮すべきことや自分たちにできることなどを考えられており、高学年になると共助の意識も高まっていることがうかがえた。地域での防災訓練で、地域と学校のつながりができているところは少ない。防災訓練の際に避難所運営を設定して、6年生に受付などを体験させてみると、本時の学習に深まりがもてると思う。
- ・ 熊本地震でも、直接死より関連死の割合が増えている。避難所での慣れない生活について、その改善策を考えていくことが今後の課題となってくる。
- ・ 南予の取組で、非常用持ち出し袋を各自一個備えている学校があった。学校の防災意識の高さが家庭への意識につながっていく。学校だけにとどまらず、家庭や地域でも続けていくことが大事である。ある研究では、3ヶ月何もしないと防災意識が低くなるという結果が出ていた。今の意識をつなげられる大人になってほしい。
- ・ 本島では耐震化されていない家屋が多いので、そういう点も見直してほしい。また、情報は常に最新のものにする。防災マップの表記と学校での掲示物の表記がずれているので、行政危機管理室の指導の下、正しい情報に書き換えておく。
- ・ 近年、異常気象に伴う豪雨や台風の被害が増加している。地震は突発的に起きるが、土砂災害や河川の氾濫などは災害に至るまでに時間に猶予がある。災害の種類ごとに避難の方法を考えさせるなら、「タイムラインで考える」という視点ももつ必要がある。災害に至るまでをタイムライン（時間軸）で捉え、どのタイミングで避難するかを家族で十分に話し合ってもらいたい。
- ・ 情報は与えられるものでなく、自分で取りに行くものである。地域ごとの情報や災害時のシミュレーションなどをチェックして、常に最新の情報を取り入れ、判断に生かすことが大事である。